The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヤマト政権成立期における猪名川流域の重要性
Author(s)	福永, 伸哉
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2016, 50, p. 1-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70030
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヤマト政権成立期における猪名川流域の重要性

福永　伸哉

キーワード：猪名川流域／古墳時代／ヤマト政権／円丘墓／前方後円墳

1　はじめに

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、日本列島の倭人社会が社会的、政治的統合へ向けて歴史の大きな一歩を刻んだ時期である。20 世紀後半以降の日本考古学は、ヤマト政権成立期とも呼称しうるこの時期の歴史動向について、その全体像を議論できるまでに至っているが、研究の基礎となる手がかりは、いうまでもなく集落跡、古墳、土器、青銅器など、それ自体ではものいわぬ発掘調査の出土資料である。そうした出土資料から復元される列島各地の「地域史」を通して、倭人社会の動きを解明することが、有効なアプローチの一つとなりうる。

小稿で取り扱う「猪名川流域」とは、北摂山地に源を発して大阪と兵庫のほぼ府県境を南流する猪名川が、平地部に流れ出て淀川分流の神崎川に注ぐまでの、本流及び支流の沿岸地域というほどの意味である。流域に形成された平野部は、巨視的には大阪平野北西部にあたるが、その一帯が旧国の摂津西部を占めることから「西摂平野」と呼ばれることもある。律令制下では豊島郡、河辺郡、現在の自治体名でいうと、大阪府豊中市、池田市、兵庫県尼崎市、伊丹市、宝塚市、川西市、猪名川町の市町域を含んでいる。一帯の地形は、北摂山地から続く最後の丘陵部から南に張り出した洪積台地を経て猪名川の沖積地へと遷移する。

筆者らは、十数年間にわたってこの地域の古墳の調査に携わる機会をも

ち、いくつかの古墳の築造時期や築造背景について新たな情報を明らかにしてきた。さらに、地元自治体等が実施してきた調査の成果や過去の出土資料の状況などを総合的に検討すると、ヤマト政権成立期における猪名川流域内部の地域関係や、畿内地域北西部に位置するこの地域が果たした歴史的な「役割」について、新たな像を提示できる段階に来ているのではないかとの思いを強くする。

上述のように、各地域のケーススタディから導かれた諸特徴を通して列島規模の歴史動向に迫るアプローチは、文字資料の援用が難しい時期の考古学研究においては、一定の有効性を持つと考えられる。小稿では、まず近年の新たな情報を加えて猪名川流域の古墳時代の勢力動向を整理分析し、その特徴を古墳時代史の大きな動きの中に位置づけた後に、ヤマト政権成立期[1)]において猪名川流域が有した地政学的な重要性について提起し、向後の検討に委ねてみたい。

2　猪名川流域における古墳築造動向の特徴

（1）長尾山丘陵の前方後円墳

2000 年頃から、筆者らは猪名川西岸の兵庫県川西市から宝塚市にかけて展開する「長尾山丘陵」において、川西市勝福寺古墳、宝塚市長尾山古墳の発掘調査を手がけ、両古墳について、従来とは大きく異なる新たな理解を得ることができた（寺前・福永編 2007、福永編 2010）。

まず、川西市勝福寺古墳については、かつて勝福寺北墳、勝福寺南墳という呼称が用いられていたように、直径 20m 程度の円墳が南北に隣接して築造されているとの見方が一般的であった。このうち、「北墳」では明治年間に墳丘が削られた際に横穴式石室が発見され、同型鏡群の 1 種である画文帯同向式神獣鏡、五鈴鏡、金銅装馬具、須恵器などが出土していた。石室は右片袖式で平天井のいわゆる「畿内型横穴式石室」であり、6 世紀前半に遡る古相の構造的特徴を持つことがつとに指摘され、「勝福寺式」という石室型

式名が提唱されたこともあった（白石 1966）。

いっぽう、「南墳」では、1933 年に墳頂部から五獣形鏡、鹿角装の刀片などが採集され、その後 1971 年には墳頂部やや南寄りから、周囲に少量の粘土を配した木棺直葬が発見され、金環・銀製山梔玉・刀子・鉄鏃などの副葬品が検出された。この木棺直葬は未攪乱の状況であったため、先の五獣形鏡はこれとは別の埋葬施設から出土したことが確実視され、石室を用いない直葬系の埋葬施設が複数存在することから、「南墳」は 5 世紀に遡る中期古墳であろうという理解が生まれたのであった。

そうした先行理解のあった勝福寺古墳であるが、2000 年以降の調査の結果、「北墳」が後円部、「南墳」が前方部となる長さ 40m の前方後円墳であること、後円部に 2 基の横穴式石室、前方部に 2 基以上の木棺直葬を設けていること、墳丘には円筒埴輪、形象埴輪が用いられていたこと、造営時期は 6 世紀前半であることなどが明らかとなった。とくに円筒埴輪は静止点なく連続するヨコハケ、底部に外面に残るユビズレ、ヒモズレの痕跡など「尾張型埴輪」と共通する特徴を持つもので、そうした技術導入がなされた背景に、近江、東海、北陸勢力の支援を得てこの時期に淀川水系で中央政権を打ち立てたと考えられる継体大王との密接な連携を想定した。

宝塚市長尾山古墳は、1969 年に宝塚市教育委員会と夙川学院短期大学日本歴史研究会が実施した測量調査の成果を踏まえて長さ 36m の前方後方墳と推定され、後方部には墳丘に斜交する粘土槨の上面が露出しているとの所見が示されていた（櫃本 1971）。発掘調査は行われていないものの、所属時期については 5 世紀前半に置く理解が有力であった。

しかし、2007 年～ 2011 年にかけて大阪大学と宝塚市教育委員会が共同で行った発掘調査によって、長尾山古墳は長さ 40m の前方後円墳であること、後円部地表下約 1m の位置が被覆粘土上面レベルとなる粘土槨を持つことが明らかになった。埴輪は普通円筒、朝顔形円筒があり、器台風に裾広がりとなるものや、上面をつまみ上げて断面 L 字状にした突帯、内面のヘラケズリなど、相対的に古相の特徴を保つものが多い。粘土槨は被覆粘土の基底部幅

が2.7mに達する巨大なもので、墓壙底一面に礫敷を有する構造と考えられ、古相の特徴をよく示している。粘土槨内部の調査は行っていないため副葬品からの検討は不可能であるが、おもに埴輪の比較から、現時点では近在の宝塚市万籟山古墳よりもやや古く、猪名川流域で確認されている最古の前方後円墳となる可能性を考えている。

この15年ほどの間に実施された調査の結果、勝福寺古墳と長尾山古墳はそれぞれ6世紀、4世紀の前方後円墳という再評価が定まった。これにより、長尾山丘陵一帯は5世紀の有力古墳の空白地となったのである。興味深いのは、長尾山丘陵において明瞭となったこうした古墳築造の特徴を、猪名川流域の西摂平野に広げて分析すると、それが古墳時代史の大きな動きとも連動した現象であった可能性を指摘できることである。

(2) 猪名川流域の首長系譜変動

当地域における有力古墳の築造状況については2003年頃までの情報をもとにかつて整理したことがあるが（福永2004）、上述した新たな情報を踏まえると、その特徴がいっそう明瞭になってきたといってよい。現時点での理解を以下に示しておこう[2)]（**図1**）。

この地域の有力古墳は、北部の北摂山地縁辺の丘陵部と洪積台地・沖積地の平地部に展開し、その分布を見ると猪名川本流と支流で画された小地域毎にある程度のまとまりを持っていることが指摘できる。猪名川東岸では、天竺川と千里川に挟まれた豊中台地（豊中市中部）、千里川と箕面川で画された待兼山丘陵（豊中市北部・箕面市西部）、箕面川と猪名川本流に挟まれた北摂山塊の縁辺部（池田市）、猪名川西岸では最明寺川を遡って標高250m程度にまで達する長尾山丘陵（川西市・宝塚市東部）、猪名川中流平地部の猪名野地域（伊丹市）などである。小稿では、これら小地域を豊中台地、待兼山丘陵、池田、長尾山丘陵、猪名野と呼ぶことにする。

猪名川流域では、豊中市服部遺跡や豊島北遺跡などで弥生終末期（庄内式期）の円形周溝墓が検出されているが、古墳時代最古段階（前方後円墳集成

編年1期：広瀬1992）の有力古墳は未確認である。[3)]

2期から3期にかかる頃までには、それぞれの小地域で有力古墳が認められるようになる。現存しない古墳のうち、大正年間に宅地造成のため削平された待兼山1号墳は、碧玉製腕輪形石製品3種、西晋鏡と見られる唐草文縁神獣鏡など顕著な副葬品の存在から、この期に含めうる。古墳の「跡地」は、現在の大阪大学豊中キャンパスの敷地北隣にあり、地形から見

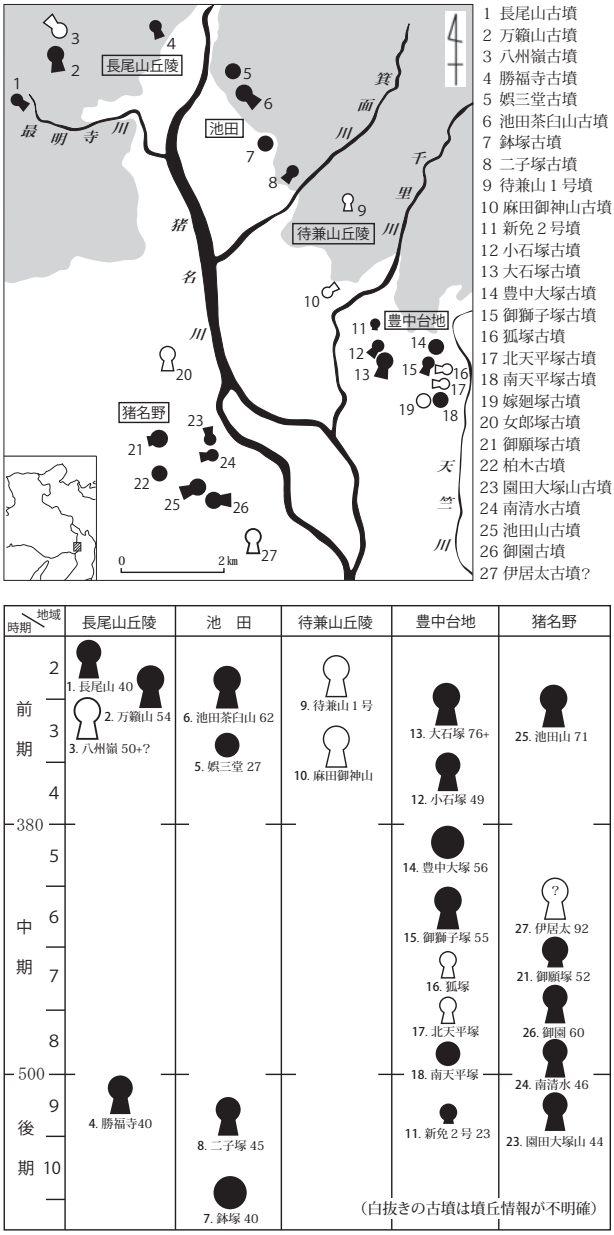

図1　猪名川流域の有力古墳の分布と変遷

て最大で 50m 程度の前方後円墳なら築造しえたと思われる。猪名野地域の池田山古墳は 20 世紀前葉には墳丘の大半が失われていたが、竪穴式石室の採用と舶載内行花文鏡を含む中国鏡 3 面の出土（梅原 1925）から見て、前期末までは下らず、3 期頃の築造も想定しうると判断する。[4)] 長尾山丘陵では、上述した長尾山古墳の新たな理解によって、同古墳と宝塚市万籟山古墳の 2 基が 2 期～ 3 期初めまでの中に位置づけられることとなった。さらに次節に述べるように 2016 年春に行われた大阪大学考古学研究室の踏査によって「八州嶺古墳」の存在が確実となり、しかも採集された埴輪は前期後葉以前に収まる可能性が高いと判断できる。

前期においては、猪名川流域では長尾山古墳が他にやや先行して築かれたと考えられるものの、全体としては各小地域にそれぞれ前方後円墳を築く有力首長が分立し、決定的な地域間の格差を読み取ることは難しい。その意味では、猪名川流域が盟主的首長を核とした全域的な中心周辺構造を持つまでには至っていないといえるが、別の見方をすれば、さほど広くないエリアの中で 5 つの小地域それぞれに前期の前方後円墳が並列して営まれるあり方からは、中央政権と幾重にも政治的パイプを有する猪名川流域の「地域力」をうかがうこともできる。

こうした前期の分立状態は中期になると一変する。長尾山丘陵の長尾山古墳が前期、勝福寺古墳が後期にそれぞれ新たな編年的位置を得たことにより、中期の有力古墳を欠く長尾山丘陵、池田、待兼山丘陵と、それが集中する豊中台地、猪名野という対比が明確になるのである。猪名野の前方後円墳群については、中期後半に隆盛期が傾く傾向がうかがえるが、早くに墳丘が失われて詳細な情報がわからないものもあり、その正確な築造の推移はなお今後の検討課題として残されている。

豊中台地では桜塚古墳群において、豊中大塚古墳から南天平塚古墳に至るまで、鉄製甲冑や革製漆塗り楯をはじめ、最新の武器武具を複数副葬する有力古墳が継続的に造られ、同時期では全国的に見ても傑出した甲冑数を有する古墳群となる。中期には桜塚古墳群の被葬者を盟主的首長とするような、

猪名川流域内での政治的な中心周辺構造が明確になったと理解できる。この時期の鉄製甲冑の生産・配布の主体が百舌鳥・古市古墳群を残した河内の中央政権であることを考えれば、分立する小地域の首長それぞれとの連携を確保した前期とは異なる方式で、猪名川流域との連携強化をはかった中期政権の意図がうかがえるのである。

しかし、西暦 500 年前後を境として古墳後期になると豊中台地の古墳群は勢いを失い、これに替わって 1 世紀以上も有力古墳の築造が見られなかった流域北部の長尾山丘陵に勝福寺古墳が現れる。勝福寺古墳には最新の畿内型横穴式石室と「尾張型埴輪」が用いられており、その技術供与の背景には、同時期にヤマト政権の主導権を握った継体大王との連携が推測されている（寺前・福永編 2007）。次いで、池田地域で猪名川流域最後の前方後円墳である二子塚古墳が築造され、その後も流域北部で巨大石室の池田市鉢塚古墳、平面八角形の墳裾列石を巡らす宝塚市中山荘園古墳などの有力古墳が続いた後に、当地域の古墳時代は終焉を迎える。

このように猪名川流域の首長墳の動向を整理するなら、地域分立状態から豊中台地勢力が盟主的な立場に浮上する中期初頭、豊中台地勢力が衰退し流域北部の長尾山丘陵・池田が優勢になる後期初頭の 2 局面に、地域関係が大きく変動する画期を見いだすことが可能になる。それぞれが、かつて都出比呂志氏が京都府南部の乙訓地域のケーススタディから提唱した変動期の二つにほぼ対応し、同氏が注目した列島最大規模墳が大和から中・南河内に、そして中・南河内から摂津三島（淀川水系）に移動する時期とも重なる点は重要である（都出 1988）。なお、猪名野地域については現時点では情報の乏しい古墳が多いが、前期と見る池田山古墳、古墳としての実態が不明瞭な「伊居太古墳」を除けば、中期後半を盛期とすると考えられる。都出氏が乙訓地域で指摘した 5 世紀後半の変動期に対応する可能性もあり、今後の調査研究が期待される。

(3)「八州嶺古墳」の確認と長尾山丘陵の前期古墳（図2）

長尾山丘陵は、猪名川本流が山間から平野に流れ出る位置にある北摂山地最後の山塊である。当丘陵では、かつては唯一の前期古墳として宝塚市万籟山古墳が知られるのみであったが、上述のように、2007 年～ 2011 年の調査によって長尾山古墳が前期半ばまでの前方後円墳と判明し、さらに 2016 年春の大阪大学による踏査において長尾山古墳から小谷を挟んだ東隣の尾根頂部に円筒埴輪が多数散布することが確認され、状況は一変した。

後者については、かつて『宝塚市史』において、この付近から埴輪片が採集され、近傍に板石を集積した箇所が存在することから、竪穴式石室を有する古墳のあった可能性が指摘されていた（橋本 1975）。現地は、万籟山古墳から鞍部を経て尾根筋を北に比高約 30m 上った標高 240m 余りの地点で、長尾山丘陵東南部では最も高いピークをなしている。ここが地元で「八州嶺」と呼ばれていたことから、同市史では「八州嶺古墳」と命名されている。[5)]

2016 年の踏査によって採集された埴輪片は数十点にのぼり、その分布範囲は現状で長さ 50m 程度にわたっている。『宝塚市史』においては、「径十数メートルくらいの円墳」との推定が示されているが、これらの埴輪が古墳破壊後に人為的に持ち運ばれたものでなければ、少なくとも 50m 程度の前方後円墳を想定することが許されるであろう。埴輪は表面状態が悪く、詳細な成形・調整技法は明確ではないものの、器壁は 1 ㎝未満と薄手で、ケズリ技法が用いられた可能性がある。また細身の突帯は突出度も高いことから、前期末まではくだらないのではないかと考えられる。

いっぽう長尾山古墳の埴輪は、底部が裾開きになる器台形のプロポーション、器台の口縁部形状をうかがわせる「L 字状突帯」の存在などから、現時点では万籟山古墳よりもやや先行するものとみている。万籟山古墳と八州嶺古墳の埴輪の先後関係は資料不足もあり今後に検討の余地を残すものの、円筒埴輪を有する前期後葉以前の前方後円墳が 1.5 ㎞程度の中に 3 基も築造された長尾山丘陵のあり方は、注目すべき特徴であるといえよう。

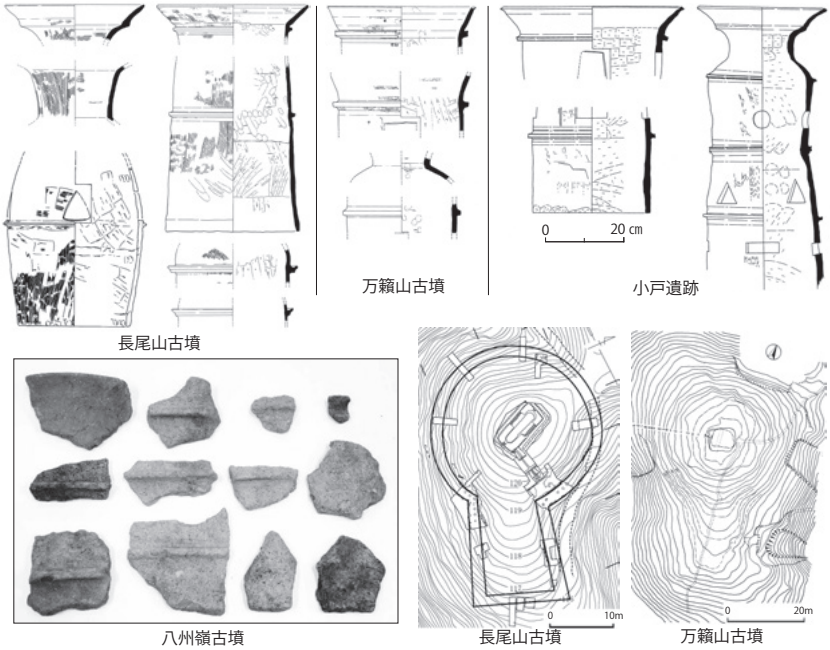

図2　長尾山丘陵の前期古墳と円筒埴輪

さらに、丘陵麓の平地部に所在する川西市小戸遺跡からもかつて多量の埴輪が出土しており（岡野 2012）、編年的には前期後葉以前の所産と位置づけられる。古墳と確実に判断できる遺構は見つかっていないが、当地域の早い埴輪普及を物語る事例といえる。[6)]

近年の調査事例も含めて猪名川流域の古墳築造動向を見ると、とくに古墳前期について、狭い各小地域すべてに前方後円墳が存在すること、なかでも長尾山丘陵には畿内縁辺部としては異例なほどの円筒埴輪を有する有力古墳が集中することの2点を指摘することができる。ヤマト政権成立から間もない時期の猪名川流域が、いちはやく中央政権の葬送儀礼に準拠していく動きの裏に、どのような歴史的背景が存在していたのか。以下では章を変えて、畿内地域の政治的まとまりが芽生える弥生後期段階にまで遡って、この問題を検討してみよう。

3　猪名川流域と近畿南北ルート

（1）突線鈕式銅鐸の道

弥生後期の畿内地域では、突線鈕式銅鐸という大型青銅器が広く分布する。筆者は突線鈕式銅鐸について、弥生中期までの農耕祭器である銅鐸の形状を受け継いでいるが、揺り鳴らす機能の消失、六区袈裟襷文という定型的デザイン、鉛同位体比から見た原材料の均一性、北部九州を中心に分布する広形銅矛に対抗するかのように大型化するなどの点から、畿内地域の諸集団の連携を表示する器物として、管理された工房で製作された地域シンボルであったことを想定している。つまり、突線鈕式銅鐸の分布は「畿内地域連合」と呼べるようなある種の政治的な親縁関係を反映していると見るのである。

猪名川流域の突線鈕式銅鐸は、古く知られていた川西市満願寺鐸（突線鈕2式）、箕面市如意谷鐸（突線鈕3式）、川西市栄根鐸（突線鈕5式）に加えて、近年では豊中市利倉（突線鈕2～3式）、豊中市利倉南（突線鈕2～3式）の2例が加わり[7]、近畿でも集中地の一つと見なせる状況になってきた。当地域が突線鈕式銅鐸の共有によって示される畿内地域の連携関係に深く関わっていたことをうかがわせる事実であろう。

このような畿内地域連合主流派としての猪名川流域の位置づけを理解する上で示唆的なのは、畿内地域のシンボルである突線鈕式銅鐸が遠く離れた北近畿のエリアからも出土していることである。但馬では豊岡市女代（突線鈕2式）、豊岡市久田谷（突線鈕5式）、丹後では舞鶴市匂ヶ崎（突線鈕3式）、与謝野町比丘尼城（突線鈕5式）などがあげられる。両地域の中間地点での出土事例がないためこれらの搬入経路を確定することは容易でないが、現状の出土分布を参考にするなら大阪湾北岸の集中地である猪名川流域から加古川上流域を経て但馬、丹後に至るルートが有力候補となることは認めてもよかろう（**図3**）。

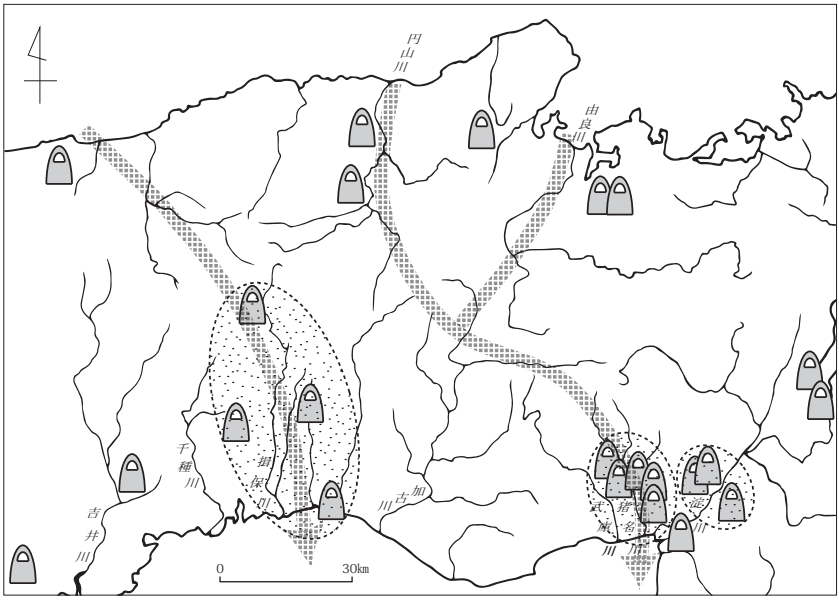

図3　近畿西部の突線鈕式銅鐸分布と推定南北ルート

筆者は、突線鈕式銅鐸のうち古相の2～3式は吉備、土佐など比較的西方まで一定量分布しているのに対して、新相の4式以降は器物自体が巨大化するいっぽうで分布域の前線が西播、阿波、南紀などを限りとするように後退してくることから、畿内地域連合がよりコアなエリアに収斂し、内部の連携を強化する方向に向かったのではないかと推定している（福永 2010）。そうした政治性がきわまった段階の突線鈕5式鐸が、北近畿及び猪名川流域の双方から出土している点に、畿内地域連合にとって猪名川を介した近畿南北ルートが重要であった事情を読み取っておきたい。

（2）文物交流の痕跡

猪名川南北ルートと筆者がいう場合、念頭においているのは猪名川上流から摂津北西部の三田盆地を抜けて、さらに北上する経路である。三田盆地以北は加古川中上流を介するなどして、北近畿の由良川水系や円山川水系に通

じることになろう。このルートを想定する場合の問題点としては、猪名川上流部において弥生後期後半から終末期にかけての顕著な遺跡が見あたらないことであった。

しかし、2013 年に新名神高速道路の建設に先立って川西市北部の西畦野地区で実施された発掘調査によって、弥生後期後半から終末期のまとまった遺物を出す遺跡が発見され、資料状況は大きく変化しつつある。範囲が数百 m にわたるため、二つの小字名を冠して「西畦野下ノ段・井戸遺跡」と命名されたこの遺跡からは、小形倣製鏡、鳥形土製品などの特異な遺物が出土しており、たんなる山間の小集落とはいえない様相をうかがうことができる（兵庫県 2016）。ただ、調査地は猪名川支流の一庫大路次川の流路脇にあって居住好適地とはいえないことに加え、この時期の検出遺構は土坑・ピットなどに限られているため、集落の縁辺部をとらえたと理解すべきであろう。

その後、この新発見を受けて川西市教育委員会が付近の過去の調査情報を精査した結果、1980 年代に東隣の西畦野遺跡で市道改良工事に伴って実施された試掘調査においても、弥生後期末～古墳初頭の土器類が長さ 200m に及ぶ範囲で検出されていたことが確認された。現時点では名称の異なる 2 遺跡であるが、両者を隔てる地形的な障壁は何らなく、一連の集落と見ることができるという見解が市教委によって示されている（川西市教委 2016）。付近は猪名川上流域の山間小盆地で、一定の平地部が広がっている。調査地点からうかがえるこの時期の遺物の分布域は少なくとも 2 ～ 3 万㎡に及んでおり、一庫大路次川流路からすこし離れた地形的にやや高い部分を中心居住域とする本格的な集落の存在を想定できよう。[8)]

西畦野下ノ段・井戸遺跡及び西畦野遺跡の存在が注目されるのは、この地が先に示した猪名川上流域から三田盆地に至るルート上に位置することである。調査面積が限られており実態は不明瞭であるものの、小形倣製鏡のような稀少品がもたらされていることから見て、猪名川南北ルートの中継点としての役割を担った集落と意義づけることも不可能ではあるまい。今後の調査研究が期待される。

この時期の猪名川ルートを通過した近畿南北の文物交流の痕跡として注目されるいまひとつの要素は、土器づくりの影響関係である。弥生後期後葉の畿内地域では、口縁端部外面が面をなす甕や椀形で有段口縁を持つ高坏など、北近畿の影響を受けた土器が散見されることが知られている。桐井理揮氏の研究によると、なかでも猪名川流域では、畿内地域に通有の「くの字」口縁甕の端部をつまみ上げたものを含めると、そうした甕の比率が約4割以上に達する遺跡が多く、その影響関係は弥生終末期にも続くという。興味深いのは、三田盆地や加古川中流域でも同様の傾向が見られるいっぽう、加古川下流域ではそれがさほど顕著ではない点である（桐井2016）。このことは、北近畿を発信源とする土器づくりの影響が加古川中流域から東折し三田盆地を経て猪名川流域に及んだことを示唆しており、それが前述の突線鈕式銅鐸から推定される経路に近似することは偶然ではないように思われる。

4　ヤマト政権成立期の地域関係

猪名川流域の勢力がヤマト政権成立期の「主流派」としての位置にあった要因の一つとして、弥生後期以降に猪名川を介した南北ルートが活性化する状況を考えてみた。その背景に、畿内地域の集団がいまや必需品となった鉄器や鉄素材の少なからぬ部分を北近畿の集団に依存した状況を想定することは、同時期の北近畿の有力墓における鉄器副葬の多さやそこに持ち込まれた畿内産の土器の存在などから見て、[9] 十分に可能である。

そうした経済面の事情は認めるにしても、ではなぜ畿内北西部の猪名川流域がヤマト政権成立過程を主導した大和盆地勢力にとって、政治的にも主要な連携相手になりえたのであろうか。筆者は、これにはヤマト政権成立期の政権中央の勢力関係が絡んでいたのではないかと推定している。

（1）弥生円丘墓の分布圏

ヤマト政権の成立を画する考古資料は、最初の定型前方後円墳として出現

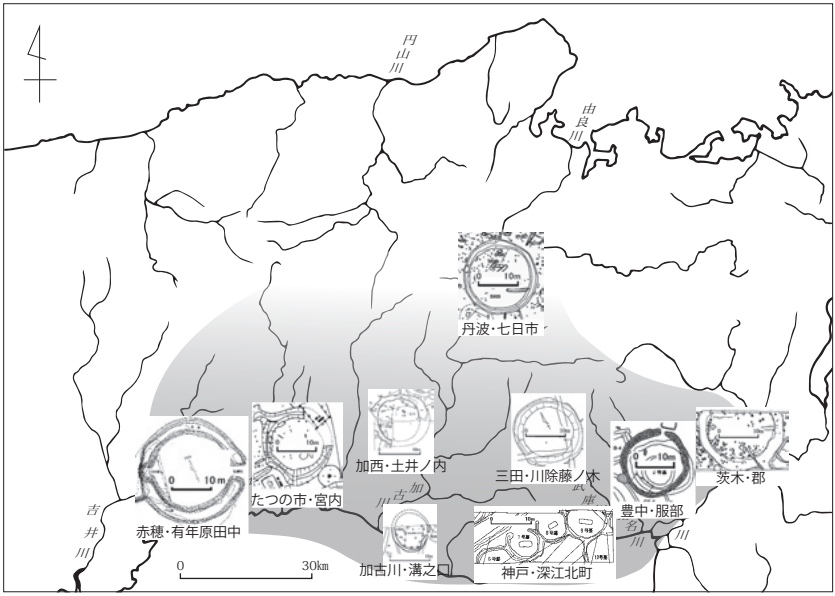

図4　弥生後期～終末期の東部瀬戸内円丘墓エリア（模式図）

した桜井市箸墓古墳である。前方後円墳という特異な墳丘スタイルが、弥生時代の円丘墓に淵源を持つことはすでに明らかになっている。これを大王墓の標準形として採用するにあたっては、当然ながら前代に円丘墓を用いた地域との連携関係が重みを持っていたであろうことが想定できる。

弥生時代の日本列島は基本的に方丘墓地帯であった。しかし、その中で近畿では播磨地域で遅くとも弥生中期前葉には小野市河合中カケ田遺跡、赤穂市東有年・沖田遺跡で円丘墓（円形周溝墓）が出現し、その後は弥生後期から終末期にかけて円丘墓の比率が増すとともに、赤穂市有年原・田中1号墓のように大型化するものも現れるという推移が明らかになっている（岸本2008）。また、内陸部では中期末の養父市米里遺跡、後期前半の丹波市春日七日市遺跡など、北近畿地域にも比較的早い段階で及んでいる（**図4**）。

東部瀬戸内北岸地域で顕著になる円丘墓は、瀬戸内東方では淀川水系の茨木市域まで面的に到達し、点的には長浜市五村遺跡、大垣市東町田遺跡な

ど、北近江、西美濃にも波及する。小論の中心的な分析対象である西摂地域では、三田市川除藤ノ木遺跡、神戸市深江北町遺跡、伊丹市口酒井遺跡、豊中市服部遺跡などの事例が確認されており、後期以降は明確な円丘墓地帯となる。このように弥生時代の円丘墓は、播磨から摂津に至る瀬戸内北岸一帯を最もコアなエリアとして展開していることがうかがえるのである。

これに対して、弥生終末期の庄内式土器の本拠地であり、ヤマト政権成立過程において主導勢力の一翼を担ったと考えられる中・南河内では、弥生後期から古墳初頭までを通じて圧倒的な方丘墓地帯であり、八尾市成法寺遺跡などわずかな例外はあるものの、ほぼ円丘墓築造を受け入れなかったという対照的なあり方を呈していることが注目される。

ヤマト政権の中枢地として最初の前方後円墳を生み出した大和盆地東南部はどうか。この地域も弥生時代には方丘墓地帯であった。しかし、弥生終末期になると、桜井市纒向墳墓群の墳丘墓を逐一あげるまでもなく、円丘系の墳丘へと急激な転換をみせるのである。その過程をとらえる際に注目すべき存在となるのは、2016 年に橿原市瀬田遺跡で発見された弥生後期末～終末期初頭の円丘墓である。上面は削平されていたが墳丘裾の直径は 19m をはかり、周囲を巡る幅 6 ～ 7m の周溝は 1 箇所が途切れて陸橋部となる形状を呈する（奈良文化財研究所 2016）。

この段階の大和盆地東南部において、ある程度の規模を持つ円丘墓が発見されたことは、前方後円墳の創出へ向けて当地域の有力者たちが円丘系へと転換したポイントを見きわめる上できわめて示唆的といえる。瀬田遺跡の円丘墓がいかなる経緯とルートを経てこの地に登場したかは推測の域を出ないが、現象面でいえば、弥生終末期開始前後の大和盆地東南部が、隣接する中・南河内と共通する方丘系からは離れて、播磨から摂津に至る畿内地域北部の円丘系の墳墓築造に同調し始めたということになろう。有力者の葬送儀礼の場が関係者の親縁関係の確認、表示の場でもあったと考えるなら、盆地東南部における円丘墓の採用の背後に、大和、中・南河内の地域関係に生じ始めた微妙な変動を読み取ることも不可能ではない。

（2）銅鏡分布の推移

内行花文鏡と円丘墓　弥生後期の瀬戸内以東に、中国鏡がどれほど流入していたかは、小林行雄氏の「伝世鏡論」の当否とも絡んで（小林 1955）、研究者間の判断が大きく分かれるところである。筆者は、古墳から出土する中国鏡の中に鏡縁が丸みを帯びるように「摩滅」したものや、内区外周の櫛歯文帯が明らかにすり減ったものが認められることから、使用期間がかなり長期にわたるものが含まれていると理解し、とくに後漢鏡についてはある程度の数の「伝世鏡」を肯定する立場に立っている。

表1　東部瀬戸内出土の漢中期鏡

地域	出土遺跡	内行花文鏡	方格規矩鏡
播磨	たつの市・白鷺山1号墳（鏡片）	蝙蝠座Ⅱ式　6期	
播磨	たつの市・岩見北山1号墓	四葉座Ⅳ式192　5期	
播磨	たつの市・吉島古墳	四葉座Ⅲ式？195　5期	
播磨	加古川市・長慶寺山1号墳	四葉座Ⅲ式210　5期	
播磨	加古川市・西条52号墓	四葉座Ⅰ式？180　5期	
播磨	播磨町・大中遺跡（鏡片）	四葉座　5期	
播磨	姫路市・手柄山（鏡片）	四葉座　5期	
播磨	佐用町・西ノ土居墓（鏡片）	四葉座Ⅳ式？188　5期	
播磨	小野市・敷地大塚古墳	四葉座150～160　5期	
播磨	〃		流雲文縁四神鏡154　4期
播磨	西脇市・滝ノ上20号墳	四葉座Ⅰ式147　5期	
播磨	神戸市・吉田南遺跡（鏡片）	四葉座Ⅰ式？　5期	
摂津	神戸市・得能山古墳	四葉座Ⅲ式？164　5期	
摂津	神戸市・東求女塚古墳	四葉座ⅤA式？164　6期	
摂津	〃	四葉座ⅤA式？155　6期	
摂津	芦屋市・阿保親王塚古墳	四葉座Ⅲ式？163　5期	
摂津	尼崎市・池田山古墳	四葉座Ⅳ式181　5期	
摂津	高槻市・闘鶏山古墳		鋸歯文縁四神鏡？　5期
摂津	高槻市・芥川遺跡（鏡片）		流雲文縁四神鏡115　4期
摂津	高槻市・塚原遺跡（鏡片）		流雲文縁四神鏡220　4期
摂津	茨木市・紫金山古墳		流雲文縁四神鏡246　4期
摂津	茨木市・東奈良遺跡（鏡片）		鋸歯文縁四神鏡　5期

時期は岡村編年により筆者が判別、鏡式名の後の数値は面径㎜。

ただ、小林氏の概念に近い「伝世鏡」を認めるとしても、いつから列島内で伝世が始まったかを示す確たる情報はなお得られていない。漢鏡 5 期（岡村 1999）の主要な後漢鏡種である内行花文鏡については、瀬戸内以東では、たつの市岩見北山 1 号墓、加古川市西条 52 号墓、桜井市ホケノ山墳墓などに出土例があるので、弥生後期末～終末期までに流入していたことは確実であるし、岐阜県瑞龍寺山頂出土例を山中式期と見るなら、製作後間もなくの時期にもたらされたことになる。暫定的ではあるが、筆者は弥生終末期に新たな神獣鏡を量的に入手する以前の弥生後期後半頃が内行花文鏡の主要な流入期だったのではないかと考えている。

興味深いのは、播磨～西摂に分布する漢中期の代表的鏡種である内行花文鏡と方格規矩鏡を比較したとき、内行花文鏡の出土数が圧倒的に多いことである（**表 1**）。この地域は、先に整理したように弥生後期から終末期にかけて円丘墓を盛んに造営したコアな円丘墓地帯にあたる。[10] 器物のデザインと墳墓スタイルの間に直接にイデオロギー的なつながりを求めることは現実的でないが、貴重な中国鏡として内行花文鏡への志向を持つ有力者たちの間に、円丘墓という共通の葬送スタイルを通じた仲間意識が存在していた可能性を指摘することは許されるであろう。そしてまた、内行花文鏡への志向という点では、ホケノ山墳墓の内行花文鏡、桜井茶臼山古墳の多量の舶載内行花文鏡と古相の倣製内行花文鏡、柳本大塚古墳や下池山古墳の超大型倣製内行花文鏡のように、前方後円墳を生み出した大和盆地東南部でも同様の傾向がうかがえることが注意されるのである。[11]

画文帯神獣鏡と三角縁神獣鏡の分布比較　弥生終末期から西日本の有力墳墓では画文帯神獣鏡が散見され始める。列島に流入した画文帯神獣鏡の製作年代については、2 世紀後葉のものを含むと見る立場（岡村 1999）や 3 世紀初頭のものが主体を占めると考える立場（福永 2001）があり、その意義についても大和盆地東南部を核とする政治勢力の活動を担った器物であるとの理解（岡村、福永前掲）や、画文帯神獣鏡の少なからぬ部分が中央政権を介することなく各地にもたらされたと見る理解（村瀬 2014）などがある。

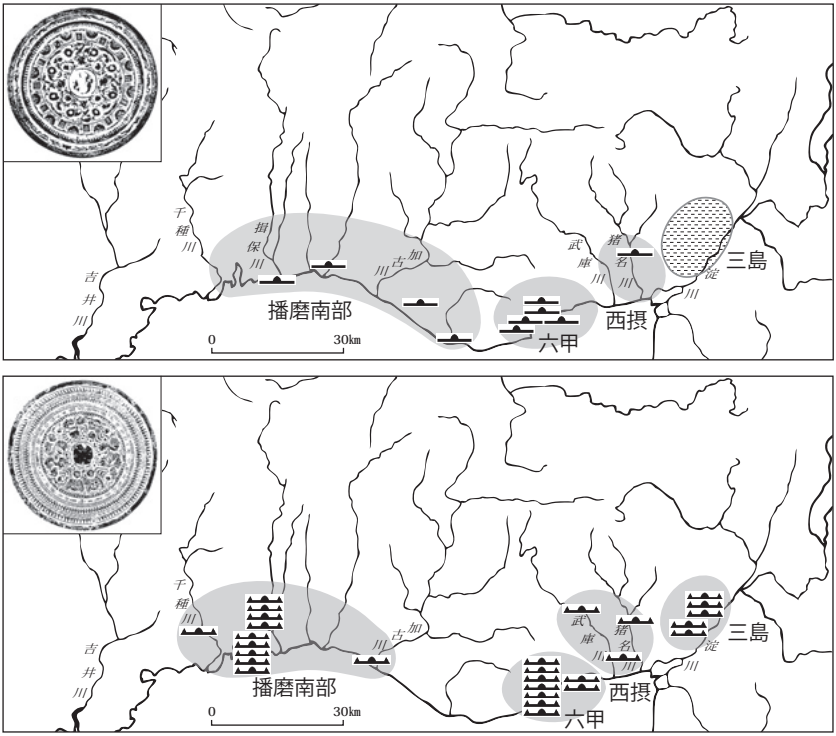

図5　東部瀬戸内の画文帯神獣鏡（上）と古相三角縁神獣鏡（下）

筆者は、この年代観と意義を踏まえて、画文帯神獣鏡は基本的に卑弥呼が「共立王」であった段階の邪馬台国政権期の、そして続く三角縁神獣鏡は魏から「親魏倭王」に制詔されて以後の邪馬台国政権末期～初期ヤマト政権期にかかる時期の中央と地域の政治関係を反映する器物ととらえている。このように整理すると、いささか素朴な作業ではあるが画文帯神獣鏡と古相三角縁神獣鏡[12)] の分布を比較することで、ヤマト政権成立期の中央と地域の関係の推移について検討する道が開けるのである。

図5・表2には、播磨から摂津に至る地域の画文帯神獣鏡と古相三角縁神獣鏡の分布を示している。これを見ると、まず播磨、六甲地域では、画文帯神獣鏡に引き続いて三角縁神獣鏡が順調にもたらされていることがわかり、

表2　3世紀の神獣鏡出土状況

地域	古　墳　名	後漢末期の神獣鏡（3C前葉）	舶載三角縁神獣鏡・魏晋鏡（3C中葉～末）
三島	高槻市・安満宮山古墳		●舶A・吾作四神四獣鏡 ●舶B・獣文帯四神四獣鏡 ●魏・半円方形帯同向式神獣鏡 斜縁二神二獣鏡
	高槻市・闘鶏山古墳		●舶B・櫛歯文帯四神四獣鏡？ ●舶B・文様帯四神四獣鏡？
	高槻市・弁天山C1号墳		舶D・波文帯三神三獣鏡 斜縁二神二獣鏡
	茨木市・安威0号墳	◇上方作系獣帯鏡（六像式）	斜縁四獣鏡
	茨木市・紫金山古墳		舶C・獣文帯三神三獣鏡
	茨木市・将軍山古墳（伝）		舶C・唐草文帯二神二獣鏡
西摂	豊中市・待兼山1号墳		唐草文縁四神四獣鏡
	池田市・娯三堂古墳	◆画文帯環状乳神獣鏡	
	池田市・横起山（伝）		●舶B・天・王・日・月・獣文帯二神四獣鏡
	宝塚市・安倉高塚古墳		赤烏七年対置式神獣鏡（※呉鏡）
	尼崎市・水堂古墳		●舶B・吾作三神四獣鏡
	神戸市・塩田北山東古墳		●舶B・天王日月・獣文帯一仏三神四獣鏡
六甲	神戸市・西求女塚古墳	◆画文帯環状乳神獣鏡 ◆画文帯環状乳神獣鏡 ◇上方作系獣帯鏡（六像式）	●舶A・吾作三神五獣鏡 ●舶A・吾作三神五獣鏡 ●舶A・吾作四神四獣鏡 ●舶A・吾作四神四獣鏡 ●舶B・吾作徐州銘四神四獣鏡 ●舶B・陳是作五神四獣鏡 ●舶B・吾作三神四獣鏡
	神戸市・東求女塚古墳	◆画文帯神獣鏡	●舶B・唐草文帯四神四獣鏡 ●舶B・獣文帯四神四獣鏡 舶C・獣文帯二神三獣一虫鏡 舶C・獣文帯三神三獣鏡
	神戸市・ヘボソ塚古墳	◆画文帯環状乳神獣鏡 ◇上方作系獣帯鏡（六像式）	舶C・唐草文帯三神二獣鏡 舶C・唐草文帯二神二獣鏡 斜縁二神二獣鏡
	芦屋市・阿保親王塚古墳		舶D・波文帯三神二獣博山炉鏡 舶D・波文帯四神三獣博山炉鏡 舶D・波文帯神獣鏡 舶・三角縁神獣鏡（鏡式不明）
	神戸市・得能山古墳	◆画文帯同向式神獣鏡	
播磨南部	神戸市・白水瓢塚古墳	◆画文帯同向式神獣鏡	
	加古川市・天坊山古墳	◆画文帯神獣鏡 ◇上方作系獣帯鏡（六像式）	
	加古川市・東車塚古墳		舶C・唐草文帯三神二獣鏡
	高砂市・牛谷天神山古墳		●舶B・陳是作五神四獣鏡
	姫路市・宮山古墳	◆画文帯環状乳神獣鏡	
	姫路市・安田古墳		●舶B・獣文帯四神四獣鏡
	姫路市・御旅山3号墳		舶D・波文帯三神三獣鏡
	太子町・松田山古墳		斜縁二神二獣鏡
	たつの市・綾部山39号墓	◆画文帯環状乳神獣鏡	
	たつの市・権現山51号墳		●舶A・張氏作三神五獣鏡 ●舶A・吾作三神五獣鏡 ●舶B・獣文帯四神四獣鏡 ●舶B・陳是作四神二獣鏡 ●舶B・波文帯四神二獣鏡
	たつの市・養久山1号墳	◇上方作系獣帯鏡（四像式）	
	たつの市・吉島古墳		●舶A・吾作四神四獣？鏡 ●舶B・唐草文帯四神四獣鏡 ●舶B・唐草文帯四神四獣鏡 ●舶B・波文帯盤龍鏡 魏・尚方作盤龍座獣帯鏡
	たつの市・龍子三ツ塚1号墳		舶D・波文帯三神三獣鏡 舶D・波文帯三神三獣鏡
	たつの市・龍子三ツ塚2号墳	◇上方作系獣帯鏡（四像式）	
	上郡町・西野山3号墳		●舶B・唐草文帯四神四獣鏡
中・南河内	東大阪市・石切剣箭神社（伝）	◆画文帯求心式神獣鏡	●舶B・獣文帯四神四獣鏡 舶C・唐草文帯二神二獣鏡 舶C・唐草文帯二神二獣鏡
	東大阪市・池島福万寺遺跡	◆画文帯神獣鏡（鏡片）	
	柏原市・国分茶臼山古墳		●舶B・新作徐州銘四神四獣鏡 舶C・吾作四神二獣鏡
	柏原市・玉手山6号墳	◆画文帯神獣鏡	
	藤井寺市・珠金塚古墳	◆画文帯環状乳神獣鏡	
	羽曳野市・庭鳥塚古墳		●舶B・吾作四神四獣鏡
	富田林市・真名井古墳	◆画文帯神獣鏡	舶D・獣文帯三神三獣鏡
	河南町・寛弘寺10号墳	◆半円方形帯神獣鏡	

中央政権との親縁関係が発展的に推移したとの理解が可能である。猪名川流域を含む西摂についても、面数は多くないものの画文帯神獣鏡と三角縁神獣鏡の双方が出土しており、未盗掘の長尾山古墳などを勘案すると面数は増える可能性がある。いっぽう、淀川右岸の三島地域では、画文帯神獣鏡は不在だが古相三角縁神獣鏡になると急増するという異なったあり方が認められる。古相三角縁神獣鏡の配布が始まる240年代になって、中央政権を主導する大和盆地東南部勢力との連携関係が一気に深まったと解釈することができよう。

こうした淀川流域から東部瀬戸内とは対照的なあり方を見せるのが、大和川流域の中・南河内である。中・南河内では鏡片も含めて画文帯神獣鏡類は6面出土しているのに対して、古相三角縁神獣鏡については舶載A段階の出土はまだなく、舶載B段階のものが3面確認できるのみとなっている。列島全体では古相三角縁神獣鏡の出土数が画文帯神獣鏡の3倍以上あることを勘案すると、中央政権との親縁関係が順調に推移していたなら、画文帯神獣鏡より古相三角縁神獣鏡のほうがより多くもたらされているのが自然といえるが、この地域は逆に三角縁神獣鏡が減少する傾向が認められるのである。また、中・南河内では1期の定型的な前方後円墳が未確認である。物資流通の大動脈たる瀬戸内海の東端にあたり、かつ大和川を通じて大和盆地と隣接する地域であることを考えればいささか不審な現象といえるのではないか。筆者は、中・南河内の銅鏡分布と古墳築造にあらわれた異例のあり方から、ヤマト政権成立の重要な局面において連携すべき大和盆地勢力との関係が損なわれるような事態が生じた状況を読み取りたいのである。[13)]

(3) 淀川ルートと大和川ルートの浮沈

弥生終末期～古墳初頭にかけて、列島で最大規模の墳墓を築造し、定型化前方後円墳の発信地となった大和盆地東南部に、邪馬台国から初期ヤマト政権の主導勢力が本拠を置いたと見る理解は最も妥当であろう。そして、魏への遣使により「共立王」から「親魏倭王」へと王の権威を格段に高めたこと

がその主導権の確立に寄与したと評価するなら、中国王朝との交渉や先進物資入手の主要ルートでもあった瀬戸内海との間を安定的につなぐことは、政権の存立基盤そのものであったといっても過言ではない。

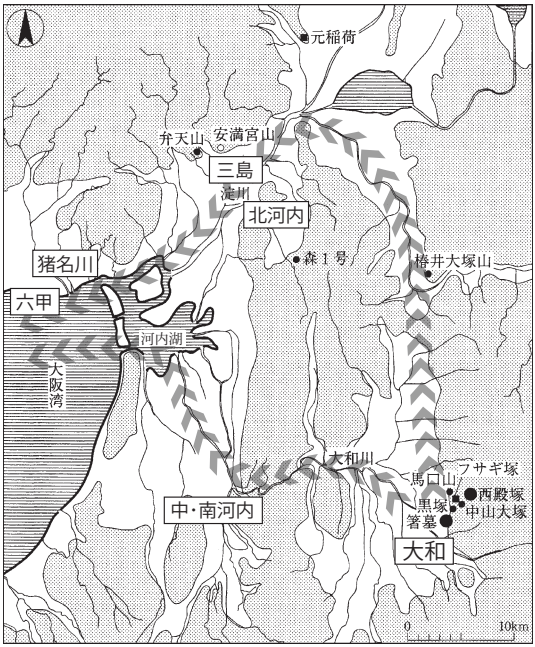

図6　初期古墳と二つのルート

大和盆地から瀬戸内海までは、生駒山地を縫って西行し大和川デルタの低湿地地帯を抜けて河内湖南岸に出るルートと、北行して木津川～淀川を経て河内湖北岸から瀬戸内北岸に至る２つの主要ルートが想定できる。上述した大和盆地東南部における弥生後期末～終末期段階での円丘墓への転換、淀川と大和川の流域における画文帯神獣鏡から古相三角縁神獣鏡への推移の対照的なあり方などを勘案するなら、ヤマト政権成立過程の中で政権の主要ルートが大和川から淀川へとシフトする大きな変化があった可能性を指摘できるのではないか。当然ながらそこには政権と流域勢力の連携関係の変動、具体的には、大和盆地勢力の連携相手が大和川流域の中・南河内勢力から淀川流域勢力へと交替するという動きが伴っているという理解である。

ヤマト政権成立過程におけるこうした畿内の地域関係の変動を想定するとき、河内湖東方に位置する北河内の動向はきわめて示唆的である。北河内では、22m × 18m の大型方形墳丘墓が確認されている枚方市中宮ドンバ遺跡、墳長 22.7m の前方後方形墳丘墓に小型方形墳丘墓が付随している寝屋川市小

路遺跡などに代表されるように、弥生終末期には中・南河内と同様の方丘墓地帯であった。

ところが、つづく古墳時代になると、前期前半から墳長 107m の森 1 号墳をはじめ複数の前方後円墳を含む交野市森古墳群が現れるほか、枚方市域でも禁野車塚古墳、牧野車塚古墳などの墳長 100m をこえる前期前方後円墳が築造され、前方後円墳の造営開始がやや遅れる中・南河内とは明らかに異なった歩調となる。[14)]

銅鏡については、3 世紀初頭の画文帯神獣鏡が未確認であるのに対して、古相三角縁神獣鏡は枚方市万年山古墳から舶載 A 段階、舶載 B 段階が各 2 面出土しており、同市藤田山古墳でも同じ魏代の顔氏作画文帯神獣鏡が認められる。三角縁神獣鏡段階になって急速に政権との連携が深まるという点で、北河内のあり方は淀川対岸の三島地域ときわめて類似している。大和盆地勢力が淀川ルートを重視し始める時期に、淀川流域勢力の一員として北河内との連携をも新たに確立したという状況を読み取れるのではなかろうか。

小稿の課題の発端となった西摂猪名川流域は、この北回りのルートがまさに瀬戸内北岸に達した地点に位置する。そこは六甲南麓から播磨を経て瀬戸内をさらに西行する東西ルートと、河谷をさかのぼり低い分水界[15)] を経てやがて日本海まで通じる弥生以来の南北ルートが交差する場所にあたる。こうした地政学的な重要性と上述した地域関係の変動が、ヤマト政権成立期の中央勢力とこの地域の有力者との幅広い連携を促し、前期古墳の集中地を生み出したとする理解が、現時点ではもっとも蓋然性が高いように思われる。

5　おわりに

ヤマト政権成立に向かう動きは、突線鈕式銅鐸の共有によって畿内地域が政治的まとまりを顕示し始めた弥生後期に端を発し、大和盆地東南部における箸墓古墳の築造をもって一つの到達点となる。小稿では、この時期にかかわる猪名川流域の近年の調査成果を整理し、域内の複数地域で前期古墳が発

達する状況を顕著な特徴ととらえ、その歴史的背景を検討した。そして、弥生時代以来の瀬戸内圏と日本海圏をむすぶ重要ルートであったことに加えて、邪馬台国から初期ヤマト政権に向かう過程で生じた大和、中・南河内、摂津をめぐる親縁関係の変化が、猪名川流域のいっそうの地政学的意義を増幅したのではないかとの仮説を提起してみた。

猪名川流域の地道な調査研究から組み立てたケーススタディを、さらに大きな背景の中に位置づけたとき、あらためてそれがヤマト政権成立過程という列島規模の歴史動向のまぎれもない一部分であったことを知るのである。つねに地域に根ざした出土資料を基盤とする考古学研究にとって、地域を越えた視点をいかに組み込むかは、研究の広がりを生むうえで一つの肝要なポイントといえるであろう。

［註］

（1）筆者はヤマト政権成立への歩みは、近畿各地の環濠集落が解体し、突線鈕式銅鐸が現れる弥生後期前葉から始まるととらえている。その後、倭国乱を経た弥生終末期に卑弥呼を王とする倭人初の中央政権として邪馬台国政権が形成され、卑弥呼の死を契機に整備創出された前方後円墳葬制の具現体である箸墓古墳の登場をもってヤマト政権の成立を画する立場である。

（2）近年の猪名川流域の古墳情報と古墳築造動向については、田中晋作ほか 2010『古墳時代の猪名川流域』（池田市立歴史民俗資料館）が参考になる。

（3）この地域は、平地部から丘陵部斜面に至るまで第二次大戦前に市街地化が進んだため、古くに消滅したことが知られる古墳も少なくない。隣接する六甲山南麓地域や淀川流域に 1 期の有力古墳が存在することから、当地の消滅古墳のなかにも 1 期に遡るものが含まれていた可能性は否定できない。後述するような北近畿へ至る重要ルートとしての意義を念頭に置けば、猪名川流域の状況は、丹波、但馬、丹後における前期古墳の動向とも関連していることが考えられるため、今後の北近畿の調査研究成果を注視しておきたい。

（4）森岡・吉村 1992 文献では、池田山古墳の築造を 5 期に下げるが、埋葬施設や出土鏡の情報による限り、もう少し時期がさかのぼる余地があると考えている。

（5）『宝塚市史』では、万籟山古墳付近でかつて採集された遺物とされる虺龍文鏡、捩文鏡、腕輪形石製品、変形琴柱形石製品などの中に八州嶺古墳出土のものが紛れ

ている可能性を指摘している。

(6) 小戸遺跡の埴輪資料は普通円筒と朝顔形円筒からなり、コンテナ9箱分ほどにもなる。遺跡は猪名川本流近くの平地部にあって、埴輪製作址、丘陵部の古墳に供給するための一時的な集積地、近隣に削平古墳が存在するなどの可能性がある。埴輪の全体的な形状は万籟山古墳のものに似るが、作りは厚手で調整もやや粗雑であり、現在われわれが知る万籟山出土埴輪とはいささか雰囲気を異にしている。今後、万籟山古墳の調査によっても同巧の埴輪が得られなければ、この地域で第4の前期古墳を探索する余地も出てこよう。

(7) 利倉例、利倉南例は破片銅鐸であるが、近隣の穂積遺跡から連鋳状態の銅鏃未完成品が出土しており（豊中市史 2005）青銅器生産が想定されることから、本来この地に存在した突線鈕式銅鐸が打ち割られ、地金に供されたものと見ている。

(8) 川西市教育委員会岡野慶隆氏によれば、「西畦野下ノ段・井戸遺跡」は「西畦野遺跡」と一連の遺跡として、今後は後者の名称で統一する方向とのことである。

(9) 京丹後市大山墳墓群、古天王5号墓、与謝野町白米山北墳墓などで確認されている生駒西麓産の大型壺などはその代表例といえる。

(10) 摂津地域の中でも淀川流域の三島地域において、鏡片も含めて方格規矩鏡が目立つ点には注意が必要である。内行花文鏡が卓越する西摂とは明らかに異なる状況であり、何らかの意味があるのではないかと見ている。

(11) 桜井茶臼山古墳では、確認された81面分の副葬鏡のうち、神獣鏡以外では内行花文鏡が最多の19面（舶載鏡9面、倣製鏡10面）を占める。なお、中・南河内では、ごくわずかな破鏡を除いては、舶載の漢鏡5期内行花文鏡は出土しておらず、その対照的なあり方はきわめて示唆的である。

(12) 古相三角縁神獣鏡としたのは、筆者編年の舶載A・B段階のもので、卑弥呼晩年の240年代にもたらされたと理解している（福永2005）。

(13) 中・南河内では、古墳初頭の土器様式である布留式が成立した後も、すぐにはそれを受け入れず、弥生終末期以来の庄内式のスタイルをしばらく維持している。このこともヤマト政権成立期の両地域の微妙な政治的距離感を反映しているように思われる。

(14) 森古墳群には、1号墳よりもさらにさかのぼる可能性のある鍋塚古墳が存在している。墳長65mの前方後方墳とされているが、筆者は既往の調査がクビレ部を広くとらえて墳丘形態を確定したものではないため、前方後円墳の可能性も残るとみている。北河内の前期古墳の動向については、交野市文化財事業団編 2009 文献が参考になる。

(15) 猪名川上流から摂津北西部の三田盆地を抜けて、北上して北近畿に至るルート上の丹波市石生付近に、本州で最も低い陰陽の分水界が存在する。標高は95m。

［参考文献］

梅原末治 1925「川辺郡塚口池田山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第2集
岡野慶隆 2012「古墳時代の最明寺川流域」『菟原Ⅱ　森岡秀人さん還暦記念論文集』菟原刊行会
岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館
交野市文化財事業団編 2009『財団法人交野市文化財事業団設立 15 周年記念　北河内の古墳－前・中期古墳を中心に－』同事業団
川西市教育委員会 2016「西畦野遺跡と西畦野下ノ段・井戸遺跡」『新発見猪名川上流域の遺跡－新名神高速道路建設調査成果から－』ミニシンポジウム資料、川西市教育委員会・猪名川町教育委員会
岸本一宏 2008「周溝墓を中心とした播磨地域の様相」『弥生墓からみた播磨』播磨考古学研究集会第9回資料集、同実行委員会
桐井理揮 2016「弥生時代後期における近畿北部系土器の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第7集、（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
小林行雄 1955「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第38巻第1号
白石太一郎 1966「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究』第42･43合併号
白石太一郎 1999『古墳とヤマト政権』文春新書
都出比呂志 1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』第 22 号、大阪大学文学部
寺前直人・福永伸哉編 2007『勝福寺古墳の研究』大阪大学文学研究科
豊中市史編さん委員会編 2005『新修豊中市史』第4巻考古、豊中市
奈良文化財研究所 2016『藤原京右京九条二・三坊,瀬田遺跡の調査』現地説明会資料
橋本久 1975「古墳は語る」『宝塚市史』宝塚市
櫃本誠一 1971「長尾山古墳外形測量調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集、兵庫県教育委員会
兵庫県まちづくり技術センター編 2016『西畦野下ノ段・井戸遺跡』兵庫県教育委員会
広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」（近藤義郎編 1992『前方後円墳集成　近畿編』山川出版社）
福永伸哉 2001「画文帯神獣鏡と邪馬台国政権」『東アジアの古代文化』108号
福永伸哉 2004「畿内北部地域における前方後円墳の展開と消滅過程」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学文学研究科
福永伸哉 2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
福永伸哉 2008「大阪平野における 3 世紀の首長墓と地域関係」『待兼山論叢』第 42 号、大阪大学文学研究科
福永伸哉 2010「青銅器から見た古墳成立期の太平洋ルート」『弥生・古墳時代における

太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会学系
福永伸哉 2013「前方後円墳成立期の吉備と畿内」『吉備と邪馬台国－霊威の継承－』大阪府立弥生文化博物館
福永伸哉編 2010『長尾山古墳発掘調査報告書』大阪大学文学研究科
村瀬陸 2014「画文帯神獣鏡から見た弥生のおわりと古墳のはじまり」『季刊考古学』第127号
森岡秀人・吉村健 1992「摂津」（近藤義郎編 1992『前方後円墳集成　近畿編』山川出版社）

［図出典］

図 2：福永編 2010、岡野 2012、櫃本 1971 掲載図を改変、集成して作成。図 4：各円丘墓遺跡の調査報告書掲載図を改変、集成して作成。図 6：白石 1999 掲載図に地域名、ルート表示を加筆して作成。

英文抄訳の作成にあたって、ジョセフ・ライアン氏から多大な援助を得たことに感謝する。

（文学研究科教授）

SUMMARY

The Importance of the Ina River Region during the Formation of the Yamato Government

Shin'ya Fukunaga

In this paper, the author analyzes the archaeological data of the Ina River region in the northwestern Osaka Plain and demonstrates that this area showed significant growth from the Late Yayoi to Early Kofun periods (1st-4th centuries AD). The author argues that during the Yayoi period such factors as the distribution of a new style of bronze bell, the influence on pottery production from the Sea-of-Japan region, and the distribution of round burial mounds that would eventually develop into the keyhole-shaped mounded tombs of the following Kofun period suggest that this region played an important role in the movement of goods and the spread of a new style of burial mound.

The author then analyzes the nature of mounded-tomb building in the region and demonstrates that during the Kofun period keyhole-shaped mounded tombs of the same style as the kingly tombs of the Yamato region were repeatedly constructed and numerous Chinese-made bronze mirrors of the newest styles are found as burial goods; moreover, the author suggests that the elite of the Ina River region and the emergent central administration (Yamato government) forged a strong cooperative relationship. This region was located at the geopolitically important crossroads of the north-south route to the Sea of Japan via the Ina River and the east-west route along the Seto Inland Sea. The author proposes that the region's development was due to its strong political and economic relationship with the emergent central administration. Finally, the author draws attention to the importance of situating the archaeological findings of local regions within the larger historical narrative of the Japanese archipelago as whole.